



鍼灸師・トレーナー 醫師

PROFESSIONAL × 塚本 理一郎 / 野田 重信 自分の目指す医療のために

—— 目標と評価で患者さんのやる気を引き出す ——

大切なことは コミュニケーション

—— 塚本先生、野田先生の専門分野を教えてください。 ——

塚本 関節外科を専門にしています。特に膝関節、股関節については長く専門でやっています。

野田 私は東京にある下高井戸ヒーリングプラザ整骨院・鍼灸院で主にスポーツ障害への施術をしています。つかもと整形外科医院では機能障害を専門にお手伝いさせていただいています。物理療法も使い、疼痛抑制、機能障害の改善を担当しています。

—— リハビリテーション室を拝見させていただきましたが、とても充実した施設ですね。何か具体的なイメージを持たれて作られているのでしょうか？ ——

塚本 来院される方の居心地のよさを大切にしたいと考え設計しています。全体的に木を多用したリラックスできる森のイメージ、充実したキッズルームなどはその一環です。リハビリテーション室では、まずは治せる器械ということを重要視しています。また来院される方の年齢も子供から高齢者まで幅広いため、専門の関節関連だけでなく、様々な症例に対応できるように充実させました。ヨーロッパではリハビリと治療を一体に

して行うことが一般的ですが、それを目指した施設づくりを行っています。

—— 超音波や物理療器具が充実されていますが、塚本先生が物理療法に注目されたきっかけは何だったのでしょうか？ ——

塚本 一般的に薬は内科で多くの方が処方されていると思うので、患者さんの負担を少しでも減らすためにも、必要なものしか使いたくないと考えています。そのために治療の一環として物理療法を含む理学療法や手技的なことも取り入れ、漢方を多く使うようになりました。もちろん薬もいいものもありますが、患者さ

んと思疎通ができていないなかでは使いたくない。治療で大切なことは、患者さんによく話して、コミュニケーションをしっかりとることだと思っています。

物理療法を活かす という考え方

—— 野田先生が週1回つかもと整形外科医院にこられるようになったきっかけを教えてください。 ——

塚本 リハビリテーション室をさらに充

実させるために、機能障害に関する知識が豊富な方にサポートしていただきたいと考えていたためです。

私は治療を延々と続けるということに反対なのですが、野田先生はそういった面でも非常に信頼できる人でしたし、そういった人と一緒に仕事ができればお互いを高めあえると思っています。

最初の印象は大きい人だなと思いました（笑）。

野田 さらに技術を高めたいという想いが常々ありました。そんな時に整形外科の医師として活躍されている塚本先生からお話をいただき、2つ返事でお受けさせていただきました。

塚本先生は、医師特有の気難しいところもなく、非常に気さくでコミュニケーションがとりやすい人だと思いました（笑）。

—— 実際の治療でどのような場合に物理療法を活用されていますか？ ——

塚本 子供であれば、外傷も含めたスポーツ障害や側弯症、高齢の方であれば主に関節症や脊髄障害ですね。ただ物理療法はリハビリではないと思っています。

治療器だけで治すのではなく、リハビリを基本として、その一環として物理療法があるイメージですね。

—— リハビリテーション室ではどのようなリハビリを行っていますか？ ——

野田 リハビリテーションでは急性期の外傷から慢性的な疾患まで幅広い方の対応をします。そのため、ただ物理療法さえすればいいということではなく、まずは患者さんの目標をしっかりと設定することが必要なんです。塚本先生による診断、そして診断に基づいて目標を定め、その目標に向かってリハビリテーションをして、可動性、安定性、運動性の3つの要素をしっかりと評価します。

例えば、可動性をあげるためにはどう痛みをとめていくのか。その1つの手段として物理療法という手段が出てきますし、手技療法の場合もあります。

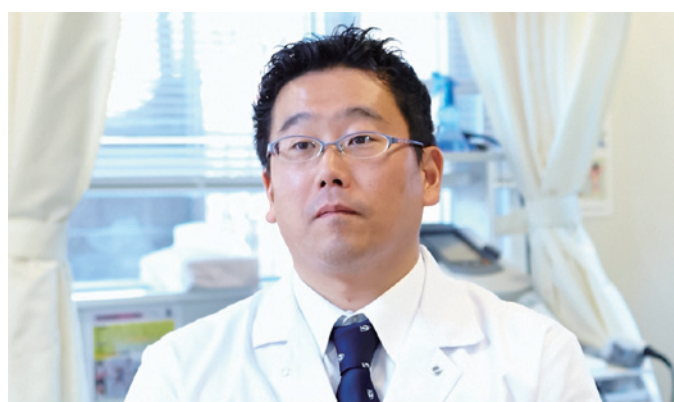
どの項目に対してアプローチするかというところに物理療法がある。

塚本先生もおっしゃっていますが、まずは患者さんとのコミュニケーションが大切です。

塚本 野田先生もおっしゃっていますが、コミュニケーションは治療の基礎になります。

来られる患者さんによって目標は人それぞれ違います。

例えば、スポーツ障害のお子さんであれば、第一目標は痛みがとれること。痛みがとれば、次は復帰をどのようにやっていくのか？さらには、野球のピッチャーだったかどうかの球数から投げはじめていくのか？など段階を追って目標を設定します。





患者さんとの話の中からADL（日常生活動作）レベルを評価し、一番不自由なことをどうすれば楽にできるのかを考える。例えば、それは筋力をあげることなのか？痛みをとるのか？などです。

塚本 スポーツに復帰できた、また高齢の方では自立したいとおっしゃる方もいます。

物理療法は痛みをとる点で、非常に優れていると思います。まず痛みがあると、その先の筋力トレーニングに進めません。人間だれでもそうですが、特に高齢の方は誰かに何かをやってもらうことに慣れてしまい、どうしても介護レベルを自身で上げてしまいがちです。

リハビリテーション室での治療は、出来ても1回につき1人10〜15分程度なので、それだけで大きく変わることは期待できません。

大切なのは、患者さん自身が自分の体に気を付け、自分で積極的に取り組もうと前向きになるように手助けをすることです。

骨粗しょう症など変性疾患の方は、筋力などの程度ついてきたのか？VAS（痛みの評価方法の1つ）、歩行などのくらい日常生活ができるようになったのか？などになります。目標が立てやすいように筋力などの程度ついたかなど数値化できる機器も導入しています。

野田 目標なしに治療をするのではなく、しっかりと評価をしてやっていくことはとても大切です。

半年、1年経っても同じことをやっているのでは、意味がないと思っています。また、ご高齢者の方はリハビリテーションでやりすぎによる圧迫骨折、関節の炎症などのリスクもあるので十分に注意が必要です。

患者さん自身に 取組んでもらうために

——リハビリテーションについて患者さんのご感想はいかがでしょう？

い。

塚本 リハビリテーションに積極的に取組もうという気持ちになってもらうためにも、痛みをまずはとてあげることが第一だと考えています。

また親子三代医者なので昭和の医療を念頭に、日々患者さんと向き合っています。患者さんが何でも話せる、また患者さんの先を背負えるようなクリニックを目指しています。

野田 「人のためにあること、道のためになること」です。

患者さんのためにベストを尽くすことはもちろんですが、自分の姿をみて後進もこの仕事をしたい、進めていきたいと思えるように道筋を立てる人になりたいと思っています。

——最後に今後、物理療法に期待することを聞かせください。

塚本 治療器は、多くのプロのアスリートも使っていると聞いています。生活がかかっている人が使うということはエビ



塚本 理一郎 (つかもと・りいちろう)

つかもと整形外科医院院長。専門は関節外科。1973年東京都生まれ。東京医科大学卒業後、1998年、厚生中央病院整形外科入局。白金整形外科病院を経て、アメリカLoma Linda University Medical Centerへ留学。帰国後、日本有数の人工股関節置換術症例を誇る湘南鎌倉人工関節センターにて医長、その後「つかもと整形外科醫院」を開業。親子三代医師として、患者さんが何でも話せる、また患者さんの先を背負えるクリニックを目指している。



野田 重信 (のだ・しげのぶ)

株式会社チームエス 下高井戸ヒーリングプラザ整骨院・鍼灸院院長。1974年福岡県生まれ。福岡大学卒業後、早稲田医療専門学校（現人間総合科学大学鍼灸医療専門学校）に進む。早稲田医療専門学校卒業後に米国公認カイロプラクティックドクター（DC）/NATA認定アスレチックトレーナー（ATC）の高見氏に師事し、カイロプラクティック・スポーツ医学を中心に学ぶ。また一般からプロアスリートまで様々なスポーツ障害、外傷の治療に携わる。根拠に基づいた医療の考えのもと手技療法、運動療法などを総合的に組み立てた治療を行っている。現在、約20のスポーツチームでトレーナーとしても活動中。



デンスがあると考えられるので、今後はさらに使い勝手のよい器械が増えればうれしいですね。

野田 超音波は15年くらい前から使っています。治療器の能力はとても高いので、それを使う人の技術を上げていく必要が

あると思っています。

いくらいいものでも患者さんに届かないと意味がありません。患者さんに届いてこそ、本当によい器械となるので、それを使いこなす人の技術の向上ができればよいなと思います。